

関西大学FDフォーラム

Vol.6



第4回FDフォーラムは、テレビ会議システムを用いて、
関西大学（写真上）と東京工業大学（写真右）を結んで
開催された。

特 集	第4回FDフォーラム	2
	2003年度春学期・前期「学生による授業評価」アンケート報告	7
	学生と教員の交流会	12

編集・発行

関西大学 全学共通教育推進機構
FD部門委員会・授業評価部門委員会

発行日

2003年11月21日

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35
Tel 06-6368-1121 Fax 06-6368-0083
URL <http://www.kansai-u.ac.jp/>

一般に大学教員は学生の声に傷つきやすい。日本の多くの大学において、学生による授業評価システムの導入にそれほど時間がかかったのも、このことと無関係ではない。わが身に照らしても、学生の「自由記述」を開封するときはいまだに俎板の鯉のような気分だ。しかし、批判を予期して怯えることも事実なら、勇気と元気を与えてくれるのが学生の声であることもまた事実である。授業のあと、学生から届いたメールに勇気づけられた経験をもつ教員も少なくないだろう。学生からの声、そしてそれに対する教員の反応—この両者がうまく噛み合うなかにこそ、授業評価のほんとうの意義がある。

今年7月、FD・授業評価部門委員会の先生方のご努力下、第一回「学生と教員の交流会」が開催された。日頃の授業や「授業評価」アンケートなどに対する学生側の考えを聞き、意見を交換するのが目的である。そのなかで、「せっかくアンケートをとっても、授業の改善に活かされているのか疑問である」、「評価結果が担当の先生にしか知らされない」などの声が多く聞かれた。アンケートが一方通行のまま、結果が具体的なかたちで学生のもとにフィードバックされてい

ないことへの不満である。

アンケートをとったからには、その結果に対するコメントや意見、さらには今後の展望を投げ返すのが本来であり、それがあってはじめて「対話」が成立する。しかしながら本学の「授業評価」アンケートには、その結果を教員がいかに受けとめ、どう今後にかかそうとしているかを開示するシステムがない。もちろん、アンケートをふまえ、それぞれの授業のなかで改善を試みている教員は多いだろう。しかしいま求められているのは、個々の教員のレベルで行われている教育改善努力を総合的・組織的にまとめあげ、大学総体の教育力向上にむけてより実効性のある展望を示すことである。アンケートが学生のモノログに終わらないために、また、アンケート結果を読む教員の感想がつぶやきに終わらないためにも、「授業評価」を通じての「対話」を積極的に紡ぎだす必要がある。

「授業評価」アンケートを全学的に導入して四年目。「アンケートをとる」実践から「アンケート結果を活かす」議論へと、あらたに歩みを進めなければならないと思う。

第4回FDフォーラム

平成15年7月2日(水)14時から17時まで、尚文館マルチメディアAV大教室において、「学生参画型授業と双方向授業」をテーマに、第4回FDフォーラムを開催した。

当日は、長谷川伸商学部専任講師が「参画型授業『中南米経済論』」、久保田賢一総合情報学部教授が「金沢大学との双方向授業」について報告。つづいて、赤堀侃司東京工業大学教授（テレビ会議システムにて参加）と黒田卓富山大学助教授を加えて、パネルディスカッションが行われた。

以下、当日報告並びにパネルディスカッションに参加していただいた講師、公開授業「金沢大学との双方向授業」の司会を担当した大学院生の伊美さんに寄稿していただいた。



学生が主体的に参加し、積極的に議論できるような授業を作るにはどうしたらよいだろうか。授業をするときにいつも心にとめている課題である。大教室での授業では、どうしても教員の一方的な説明になってしまう場合が多い。講義においても、わたしはできるだけ学生に質問をして対話を促したり、グループで討議したり、発表をさせたりするような工夫をしている。しかし、200人を超えるクラスで実行するのはなかなか難しいと感じている。また授業中だけでなく、授業時間外にもウェブを活用することで学生が積極的に意見や感想を述べる場を用意して、学生の主体的な参加を促している。ウェブを活用することの利点は次の3点であると思う。第一は、投稿した意見を教員だけでなく、学生も見ることができることである。第二は、授業中にうまく発言できなかったり、わからなかったりしたことを授業後に時間をかけてじっくり考え、自分の意見を文章として投稿できることである。第三は、授業のやり方などに関する問題点や意見を学期中に直接教員にフィードバックできることである。

今回の公開授業では、参加型の実践を遠隔授業の形で実施してみた。久保田ゼミと黒上ゼミと合同で、TV会議システムで金沢大学と接続し、討論をおこなった。関西大学側では主に三年生が、金沢大学では大学院生と現職教師が参加し、教育改革のキーワードである「生きる力」について討論した。事前にNHKの番組を視聴し、共通の問題意識を持ってもらい、遠隔授業に臨んだ。学生にとって初めての遠隔授業ということで緊張し、対面と比べてぎこちない面もあったが、年齢も経験も違う人たちと議論をすることで、大学生だけでおこなうよりもふくらみのある議論が展開できた。たとえば、金沢大学にいる現職教師が、現場で困っていること、教室でどのように総合学習を展開しているか、具体的な実践の話から「生きる力」とは何か話してもらった。教職経験のない学生にとっては、とても



第1回公開授業司会者の学生と（第4回FDフォーラムより）

新鮮な意見である。遠隔授業では、普段は出会うことのない人たちと対面し、さまざまな意見を聞くことができるメリットがある。

今回のTV会議システムを使った遠隔授業は、学生にとって初めての体験であり、とまどいもあった。しかし、こういう体験を通じてメディアを介したコミュニケーションの方法について学んでいくことができる。公開授業の後、フィリピン大学とも遠隔授業を実施した。これは二回目の体験であるが、今度は英語でのコミュニケーションが必要であり、また新しい体験である。

もちろん遠隔授業の実践だけでなく、直接体験も取り入れることが大切である。夏休みはゼミ生とともにオーストラリアに出かけ、現地の大学を見学したり、小学校や中学校を訪問したりした。実際に現地に行き直接体験をすることは、学生にとって生涯心に残る経験となった。

参加型学習の方法は多様であり、いろいろな活動を取り込むことが必要である。このような参加型の授業を進めるためには、学部を越えたつながりを作り、さらには他大学との連携が大切になる。今回のFDフォーラムに参加して頂いた東工大の赤堀先生や富山大学の黒田先生は、遠隔授業の先進的な実践をしており、このような連携のなかから役に立つノウハウを学ぶことができる。学内、学外の教員同士とゆるいネットワークを作り、必要な情報を共有することを支援する環境を整備する必要があると感じた。（FD部門・授業評価部門委員長）



第1回公開授業風景（5月21日開催）

さる5月21日、関西大学と金沢大学を結ぶ遠隔ディスカッション「生きる力ってなんですか？」を行いました。そこで私は、司会者という立場で参加し、感動と問題点を目の当たりにしました。今回は、そのあたりを中心に遠隔ディスカッションの報告を行います。

この公開授業を行うまでに事前に、学部生参加のディスカッションを2回行いました。学部生は、ディスカッションを行うための知識も、ディスカッションの経験もなかったため、自分自身の経験と現在の教育についてまとめてもらい、ディスカッションを行いました。最初のディスカッションでは、学部生は、自分の体験のみを恥ずかしそうに話していた、という印象が目立ちました。しかし、2回目のディスカッションでは、自分の経験と現在の教育を論理的に、堂々と発言をする姿が見られました。2回というとても少ないディスカッションの間に成長した姿を見ることができ、うれしく思いました。

このような姿を目の当たりにした一方、司会者側は、ディスカッションを行う前に、数限りない電子メールを使っのミーティングを行いました。メールを送り始めた頃は、どのようなテーマで話をするのか、など大まかなことしか話題になりませんでした。しかし、学部生対象のディスカッションを行うにしたがって、今までのミーティングでは本番のディスカッションは進められないと思い、具体的なディスカッションの流れの部分に話は発展していきました。その中で考えさせられたことは、遠隔ディスカッションを行う際に必要なミーティングは、メールだけではなく、電話やファックスはもちろん、チャット機能やテレビ会議機能を使って「顔が見えるようにする」ことが大切であると思います。メールでの連絡は、時間に気を取ら

れることはありませんが、伝えられる量はそれほど多くありません。一方、顔が見えるミーティングは、声だけや文字だけでのものよりも、相手との信頼感が増し、話の進み具合が格段に違います。

そのような事前ミーティングを行うにしたがって、金沢大学側の意図を理解し、ディスカッション当日を迎えました。関西大学側も、2回のディスカッションとは別に、勉強会などを行い、当日に臨んでいました。両校の参加者は、一度も対面したことのない相手に不安や戸惑いを覚えているように思えました。

関西大学側の発言で、金沢大学側がそれに答える、と言うスタイルでディスカッションが進みました。しかし、ディスカッションを進めるうちに、議論がかみ合わない場面も発生しました。「ゆとり教育」の是非についてディスカッションが行われていた時、関西大学側と金沢大学側とで「ゆとり」の捉え方が微妙に違って、議論がストップしました。その時、金沢大学側で司会役をやっていた加藤助教授が方向修正をしていただき、ディスカッションがかみ合うようになりました。そのあたり、事前のディスカッションで十分にコミュニケーションをとったから出来たものだと思います。しかし、発言をするたびに、普段のディスカッションと同じような雰囲気近づき、活発な発言が繰り返されました。

最後に、司会者側の事前の用意は重要であると感じましたが、それ以上に遠隔ディスカッションは、事前の用意以前の「相手を知り、十分なコミュニケーションをとる」ということが重要であると思いました。これから、テレビ会議システムを使用したディスカッションや講義は、より身近になりつつあります。しかし、ただそのようなシステムを使うだけではなく、向こうにいる相手とのコミュニケーションをとろうとする気持ちこそ一番大切なのかもしれません。

(大学院総合情報学研究科博士課程前期課程)



関西大学の久保田先生のお誘いを受けて、関西大学と東京工業大学をTV会議で結んで、FDフォーラムを行った（写真1を参照）。途中でTV会議が中断したことは残念であったが、とにかく西と東を結んで、フォーラムができた。中断した技術的な理由は後でわかったが、このことから、TV会議では、あまり凝らない使い方をするという教訓を得た。凝らないと言う意味は、何か特別な技術を導入しないということである。使い慣れていないと、予期しないトラブルに対応できないからである。TV会議などの同期型のシステムでは、時間が気になってあせるので、冷静な対応ができないからである。



（写真1）FDフォーラムの東京工業大学からの光景、10名の学生が参加した。

私の研究室では、このTV会議を日常的に使っている。毎週月曜日の午後6時から7時半までのゼミを、獨協大学の立田先生の学生も参加できるように、TV会議を用いて交流している（写真2を参照）。私の研究室では、およそ20名の参加者がいるが、獨協大学では数人なので、私の研究室の学生の発表や討論風景を、獨協大学に送るといった形態が多い。しかし、獨協大学の学生も発表するので、こちらが受信するという形態もある。もちろんTV会議は双方向にやりとりができるので、この討論は、まさに両方の学生が行う。すでに前期に15回程度実施した。この実践でもいくつかの経験的な知見を得た。

1つは、議論は活発に行われるという点である。ゼミでは、30分から40分プレゼンテーションを行い、その後50分から1時間くらい討論するので、討論に重点をおくゼミである。私自身が毎週楽しみにしているゼミで、研究室所属の学生だけでなく、他の教育機関からも参加者がいる。伝統的なゼミなので、休むのは、夏休みと冬休みの数回程度で、後は必ず行うという、

トレーニングのゼミになっている。TV会議を用いていることは、数回も経験すれば日常的になって、特に意識することはない。

2つは、他大学から別の発想の質問や議論があると、さらにゼミは活発になる。したがって、TV会議はこのような議論や、共同ゼミなどに、適していると言える。

3つは、学生達は、それぞれの研究室の文化の違いを体験するという意義である。質問するにもコメントするにも、それぞれの文化があって、その文化をお互いが共有する体験をしている。私の研究室は、理工系の大学にあるという背景もあって、夏でも8月中旬までゼミを行っている。そのような文化に接する事自身が、他大学でも大きな刺激になる。

4つは、何回かTV会議を継続すると、直接に対面してゼミを行いたいという意識が働き、獨協大学の学生が、私の研究室に実際に訪問することもあった。画面だけしか知らない学生の姿や雰囲気や部屋の様子を、実際に体験したいという意識が働くからであろう。

最後は、このようなTV会議を用いたゼミが継続するには、いくつかのルールが必要だということである。その中でも、私は、どんな研究でも優れた面を持っているので、重箱の隅を突くような、けちをつけるような質問や議論はしないようにと、常に言っている。実は、大切なことで、どうしたら研究が良くなるか、建設的な意見を述べるように、指導しているが、それも研究室の文化である。

TV会議を用いた実践は、つまるところ、異文化理解の過程と言えよう。（東京工業大学教育工学開発センター教授）



（写真2）獨協大学と結んだTV会議のゼミ風景

今回、関西大学FDフォーラムに参加させて頂き、私自身大変たくさんことを学ばせて頂きました。大学、特に学部教育における授業は、いま大きな転換期を迎えていることを改めて認識しました。

「テストの成績が悪いのは、学生が勉強しないからだ」と、責任を学生に押しつけていられた時代はすでに終わり、「わからない、できないのは、先生の教え方が悪いから」というように授業の評価の観点が変わってきています。今回のフォーラムでは、2つの授業のビデオを拝見し、テレビ会議システムを利用して、多地点でディスカッションを行いました。2つの授業とも、学生の参加、参画を重要なポイントとしてデザインされたものであり、大変巧みな学びの仕掛けが作られていました。教える側にとって、一番楽な授業は、一般的に行われている、教師が前に立って、教えるべき内容をしゃべり続ける授業です。教師は知っていることをしゃべるだけで良いわけですから、準備もほとんどいりません。しかしながら、学生自身に学びに参加、参画させる授業を実施するには、周到な授業のデザインと、教材の準備が必要になります。学習者が学びに意欲的に参加し、満足感を得るだけでなく、学ぶべき事に関してきちんと学べるような教師の授業デザイン、フォローアップが必要になります。これは、教師にとってかなりの負担になることは間違いありませんが、授業を変えていくためには取り組んでいかなければならない事でしょう。

長谷川先生の学生参画型授業では、前学期に教師主導でグループ学習に取り組み、それを通してグループ学習の方法も身につけさせ、後学期は、それぞれのグループが独自に学習に取り組める体制を作っています。教師の役割が、授業が進むにつれ、モデリングーコーチングスキャフォールディング（足場作り）と変わっ

ています。最終的には、各自がそれぞれのテーマで研究を進められるようになっていくものと考えられます。3枚複写式のカードを振り返り、まとめに活用するといった工夫も大変有効な手段であると考えられます。このような細かい配慮の方法も、学ぶべき事項であると考えられます。

久保田先生、黒上先生が実施された、遠隔交流学习は、これからの情報社会において、ますます使われていくであろう技術を活用した授業実践例でした。今回はISDNを利用していましたが、すでにインターネットを利用したTV会議システムも実用レベルにあり、今後ますます容易に実施できるようになります。この技術を利用した、バーチャル大学が、日本でも始まっており、通常の授業も、家庭のコンピュータで受講することが技術的にはできるようになっています。今回は離れた場所に住む学生が、TV会議を利用してディスカッションを行う場面が紹介されました。ビデオではコンパクトに議論が編集されていましたが、実際はどうだったのでしょうか。私の経験では、このようなディスカッション型の利用は、お互いがよほど知り合っていないければ大変難しく、むしろ、初めて実施する場合は、お互いの考えのプレゼンテーションを相互に聞きあい、それを元に質問を行う方がスムーズに進行すると思います。TV会議はこれからの大学の授業改善にも大変有効なメディアの一つだと思いますが、それをどのような場面で使えばより強力な道具として活用できるかは、今後さらに検討を行う必要があると思います。

教員どうしがお互いに授業のアイデアを交換し、より良い授業を作り出していこうとする取り組みは、今後ますます重要になってきます。また、ネットワークを利用した授業単位互換なども今後増えてくる事が予想される今、このような機会を与えて頂き、自分自身の授業についても改めて考えさせられました。本当にありがとうございました。（富山大学教育学部助教授）



2003年度 春学期・前期「学生による授業評価」アンケート報告

趣旨及び目的

より質の高い教育を行うためには、直接学生の声を聞き、授業に反映させることが必要であるとの認識に立って、その有効な手段である「学生による授業評価」を全学的に実施する。

実施方法

- (1) 無記名のアンケート用紙及び自由記述用紙による（総合情報学部及び工学部の自由記述用紙は、授業担任者の意向により記名式にすることができる）。
- (2) 授業担任者が、アンケート用紙及び自由記述用紙を実施当日の全出席学生に配布し、回収する。
- (3) 回収したアンケート用紙は、授業担任者が学部・外国語教育研究機構事務室又は講師（教員）控室に提出する。自由記述用紙は回収後、担任者が保管する。
- (4) 集計結果は、科目毎に一覧表にまとめ、各授業担任者へフィード・バックする。

実施期間

2003年6月16日(月)～6月28日(土)

対象

- (1) デイタイムコース・第1部及びフレックスコース・第2部の2003年度春学期・前期開講の講義科目（教養科目・保健体育科目・専門教育科目）・外国語科目（日本語を含む）及び体育実技を対象とする。複数担任科目（リレー講義等）は除く。
ただし、通年科目については、担任者の申し出により、実施することができる。各学部・外国語教育研究機構の意向により、講義科目及び外国語科目以外の科目も対象とすることができる。合併科目は担当学部でとりまとめる行う。
- (2) 各学部・外国語教育研究機構の専任教育職員及び非常勤講師を対象とする。

全体の講評

堀井 健

1. 実施状況

表1に2003年度春学期・前期の授業評価アンケート実施状況を示した。実施率はアンケートを実施したクラスの割合を表し、回答率は学生の延べ人数によって算出した。

授業評価アンケート調査は6回目であるが、今回体育実技に関しては独自のアンケート表による調査を実施した。図1に実施率と回答率の経年変化を示した。今回の学部、2部および保健体育ごとの実施率は、保健体育96.8%、経94.4%、社92.1%、文91.1%、2部89.6%、総情88.3%、商88.1%、工85.7%、法78.4%、であった。

回答率（アンケート実施時における出席率の平均値とみてよい）は、昨年秋のアンケート調査時のものと

比べると1割近く高くなっている。表1に示したように、講義、外国語科目および体育実技を合わせた今回のアンケート全体の回答率は43.8%である。また、講

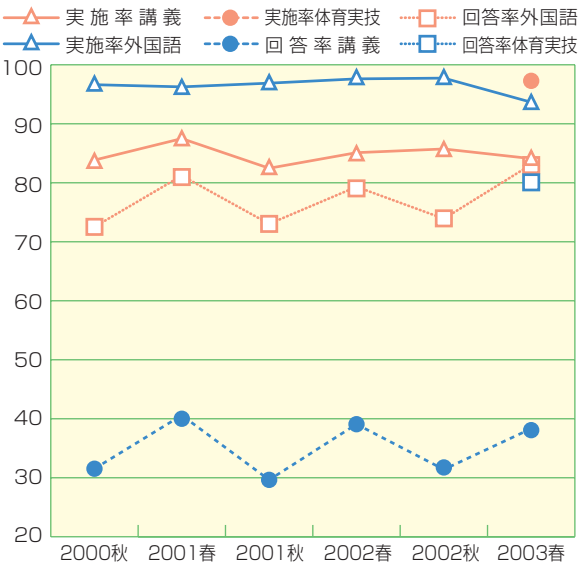


図1：授業評価アンケート実施率、回答率の変化

表1：アンケート実施状況

			講義	外国語	体育実技	全体
春学期・前期 開講科目	対象	a:科目(クラス)数	1,394	806	219	2,419
		b:学生数	197,759	27,162	8,576	233,497
	実施	c:科目(クラス)数	1,184	757	213	2,154
		d:回答者数	72,702	22,652	6,919	102,273
	実施率	c÷a	84.9%	93.9%	97.3%	89.1%
	回答率	d÷b	36.8%	83.4%	80.7%	43.8%
通年科目	実施	科目(クラス)数	19	6	2	27
		回答者数	495	106	35	636
実施合計		科目(クラス)数	1,203	763	215	2,181
		回答者数	73,197	22,758	6,954	102,909

注)「学生数」「回答者数」は延べ人数。

義、外国語科目および体育実技を合わせた学部ごとの回答率は、保健体育69.6%、文55.7%、2部48.5%、工45.7%、社43.3%、総情41.8%、経39.4%、商37.9%、法30.8%であった。(なお、通年科目については分析の対象から除外している。)

2. 全体的傾向

全学の2,419のクラスについて、延べ233,497人を対象とする「学生による授業評価」アンケートの結果がえられた。質問項目は図2に示したような内容からなる21項目である。「⑤強く思う、④思う、③どちらとも言えない、②そう思わない、①全くそう思わない」の5件法で評価した。5に近いほど良い評価、1に近いほど悪い評価となる。データの集約は次のような手続きで行った。各質問項目ごとにその項目に属する全クラスの個々の評定平均値を0.5の値の間隔でグループ化し、8つの評価段階に分類した。その8つの評価段階に対して、A+ (5.0～4.5)、A (4.5～4.0)、B (4.0～3.5)、C+ (3.5～3.0)、C- (3.0～2.5)、D (2.5～2.0)、E (2.0～1.5)、E- (1.5～1.0) というラベル付けを行った。境界の値は上の評価段階に入れた。

図2に、各質問項目について、クラスの評価平均値の分布を示した。質問項目を、各項目の評価段階がC+以上のものの比率が高い順に並び替えてある。評価の高い項目が上の方に、評価の低い項目が下の方

にくることになる。「出席の評価 (13)」が最も高いのは、出席者しか調査していないために得られた結果であろうと思われる。

「声が聞き取れる (3)」、「授業内容が要項 (1)」、「熱意 (4)」および「質問への対応 (8)」などの質問項目においては、評価平均値B以上のクラスが80%を占め、C-以下のクラスはわずか数%である。これらの評価結果は特に先生方の授業への取り組みに対する工夫・改善の努力が実ってきたことを表している。しかし、こういった状況の中でも特に評価平均値がD以下に該当するクラスにおいては、今後ともその質問項目に対する何らかの対応・対策をとる努力がいっそう必要である。

一方、「予習・復習 (15)」、「設備 (18,19)」、「TA・SA (20)」、「触発 (11)」、「黒板 (6)」、「機器の使い方 (7)」および「実習機材の利用 (21)」などの質問項目においては、評価平均値C+以上のクラスが70%を超えているものの、C-以下のクラスが10～20%に達している。

「設備・機器に関する質問項目 (18,19,21)」に対する結果は、個々の教員の教育スキルに起因するというよりも、その授業環境にあるものと考えられ、今後良好な授業環境を早急に整備する必要がある。「黒板 (6)」や「機器の使い方 (7)」の質問項目は、個々の教員の教育スキルそのものに左右されるので、今後教員個人の教育スキル向上への更なる努力を期待したい。

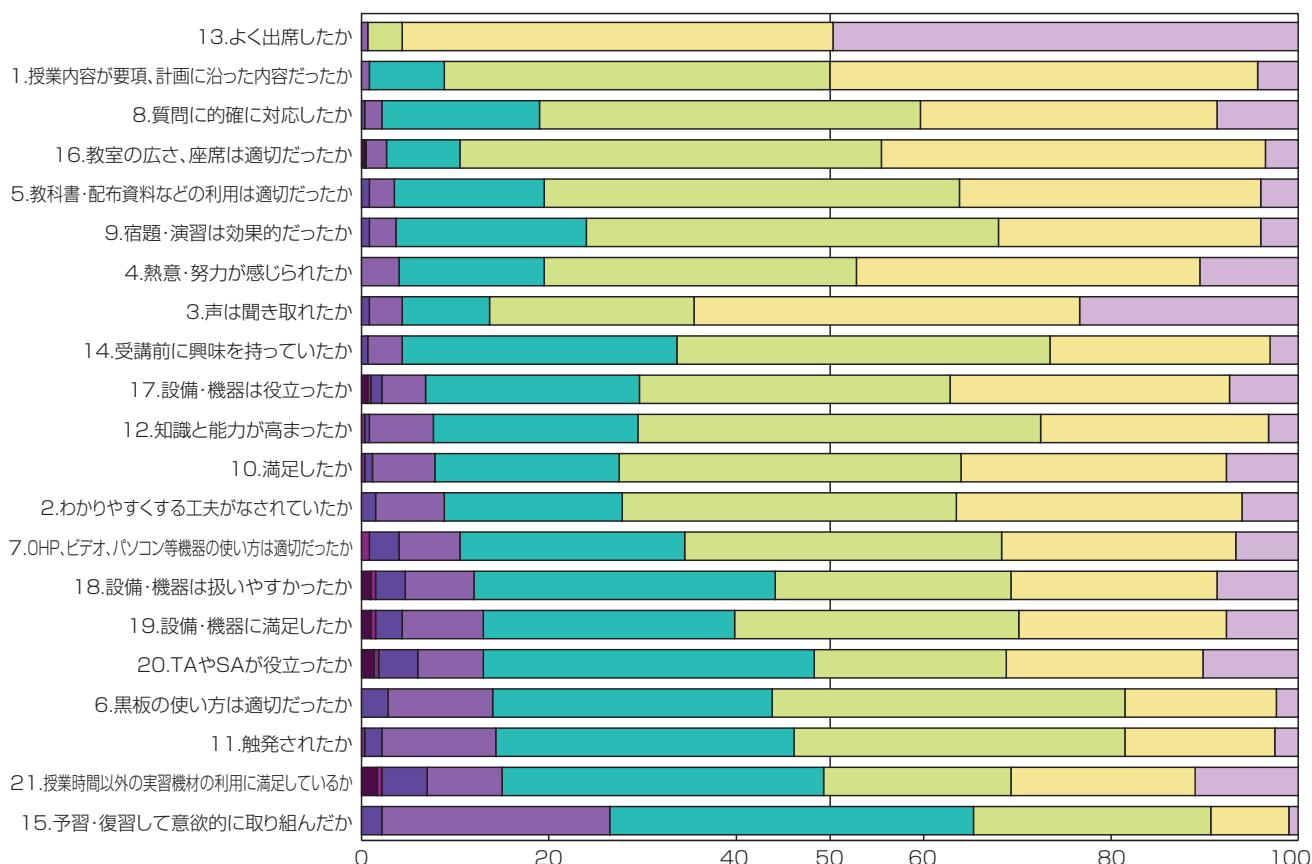


図2. 各質問項目についてのクラスごと評価平均の分布。クラスの評価段階がC+以上のものの比率が高い順序とした。

表2. 学部ごとのクラス評価平均の標準値3.0からのずれ

	法	文	経	商	社	工	情	外	全平均
1. 授業内容が要項、計画に沿った内容だったか	〇〇〇	〇〇〇	〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇	〇〇	〇〇〇	3.9
2. わかりやすくする工夫がなされていたか	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	3.7
3. 声は聞き取れたか	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇	〇〇	〇〇〇	4.0
4. 熱意・努力が感じられたか	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇〇	〇〇	〇〇	〇〇〇	3.8
5. 教科書・配付資料の利用は適切だったか	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇〇	3.7
6. 黒板の使い方は適切だったか	〇	〇	〇	〇〇	〇	〇	〇	〇〇	3.4
7. OHP、ビデオ、パソコン等機器の使い方は適切だったか	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	3.8
8. 質問に的確に対応したか	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇〇	3.8
9. 宿題・演習は効果的だったか	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	3.7
10. 満足したか	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	3.7
11. 触発されたか	〇	〇	〇	〇〇	〇〇	〇	〇	〇〇	3.4
12. 知識と能力が高まったか	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇	〇〇	〇〇	3.6
13. よく出席したか	〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	4.4
14. 受講前に興味を持っていたか	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇	〇〇	〇〇	3.6
15. 予習・復習して意欲的に取り組んだか		▼	〇		▼	〇	〇	〇〇	3.2
16. 教室の広さ、座席は適切だったか	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇〇	3.8
17. 設備・機器は役だったか	〇〇	〇〇〇	〇〇	〇〇	〇〇〇	〇〇	〇〇〇	〇〇	3.8
18. 設備・機器は扱いやすかったか	〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇	〇〇	〇〇	3.6
19. 設備・機器に満足したか	〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇	〇〇	〇〇	3.6
20. TAやSAが役立ったか	〇	〇	〇〇	〇	〇	〇	〇〇〇	〇〇	3.6
21. 授業時間以外の実習機材の利用に満足しているか	〇	〇	〇〇	〇	〇	〇	〇〇〇	〇	3.5

(ここでの学部は、授業を担当する専任教員の所属学部と非常勤講師などの推薦母体となった学部(教養・体育実技・教職に関する科目だけの担任者は文学部)である。)

クラス評価平均値の標準値3.0からのずれを0.4きざみに図化したもので、○一つにつき一段階上り、▼一つにつき一段階下る。

また、「予習・復習 (15)」、「触発 (11)」や「受講前の興味 (14)」の質問項目は、教員と学生との相互作用に関わるもので、普遍的な対応を見出すことが困難であるが、これらの項目の評価向上に向かって何らかの対応を見出す必要がある。さらに、「TA・SA (20)」の質問項目に対し、評価平均値の低いクラスが少なからず見受けられる。TA・SAの制度が今後とも有効に運営されるためにも、その原因を見出す必要があるだろう。

3. 学部比較

表2に、質問1から質問21までの各項目につき、各学部におけるクラス評価平均値と標準値3.0との差を学部ごとに示した。

項目(1)から項目(15)までの質問は授業内容自体に関するものである。この範囲の評価を見てみると、全学部を通じて標準よりは良い評価を得ている。項目(15)に関してのみ、文学部と社会学部の評価が低い値となっている。この項目は特に学生の意識が強く作用するものであるゆえ、この結果をそのまま他の学部と比較することはできない。

項目(16)から(21)までの質問は、主に授業環境に関連の深いものである。この範囲では、法学部と工学部における評価が厳しい結果を表している。この結果からして、法学部と工学部における授業環境の改善の必要性が読み取れる。

工学部の分析結果を見てみると、全学で唯一質問項目(14)「受講前に興味を持っていたか」の評価点が低い。このことは学生の興味(将来の方向を定めるファクター)と講義科目の内容との間にミスマッチングが少なからず存在することが推測される。もしこの推測が的を得ているならば、評価の低い上述の2,3の項目

も、このことに関連して生じた結果であると思慮される。

前節で、TA・SA(20)の質問項目に対し、評価の低いクラスが全学的に少なからず見受けられることを指摘した。表2より、総合情報学部、経済学部および外国語科目においては、この項目に関して高い評価を得ている。それゆえ、この2学部+外国語科目と他の学部におけるTA・SA(20)の運営形態の違いを比較し、今後の工夫・改善への足がかりを見出すことが必要であり、可能でもある。

全体にわたって因果関係を明らかにするためには、1クラスあたりの学生数や授業形態、教室の設備、機器などとの関連、学部教育に対する学生の期待と授業の負担感などの調査データとの関連、学舎の改築などに関連しての評価の経年的変化の追跡など、より具体的なデータの分析が必要である。

(FD部門・授業評価部門委員会委員)

1. 結果の講評

① 全体像

本アンケートは、授業内容、授業方法、授業による成果、受講態度、施設・設備・機器の5領域に関する21の質問項目より構成されている。領域別の平均値をとってみると、授業内容3.9、授業方法3.9、授業による成果3.7、受講態度4、施設・設備・機器3.7という値が得られ、全体として肯定的に評価されているようだ。1や2といった低得点をつけた回答者は総じて10%に満たないが、5や4といった高得点をつけた回答者がほぼ全質問項目で過半数を占めている。このことから、改善の余地はあるものの、全体として学生は授業を好意的に捉えていることがわかる。

ただし、データ分析は全授業の平均値をもとに行っているため、各授業・各教員の評価についてはコメントできない。平均値を上回る評価を得た教員もいれば、平均値を下回る評価の教員もいるはずである。問題となりうるのは平均値を大きく下回る教員であろう。評価が低い場合は、教員の教育理念と学生の意識の乖離によるものなのか、それとも単に熱意が無く悪い授業なのかを見極める必要がある。いずれの場合も、まずは学生と教員のコミュニケーションを促進し、お互いの理解を深めて信頼関係を築く必要があろう。

② 点数が低めの項目

点数がやや低めの項目は、「6. 黒板の使い方は適切でしたか」(3.6)、「11. この授業に触発されて、さらに深く学習しようと思いましたか」(3.5)、「12. この授業を通じて、知識が深まった、能力が高まったと感じますか」(3.6)「15. 予習・復習するなど、この授業に意欲的に取り組みましたか」(3.5)などである。外国語の運用能力向上を目指す授業では、発音練習やパートナー練習などの時間が重要なため、体系的かつ詳細に板書を行うのは時間的にも困難である。現実には、教科書の記述を補足する重要事項を最小限板書するにとどめることで、授業効率の向上に努めている教員が多いのではないかと推測される。このこと自体はマイナス評価とは言えないだろうが、板書の方針を事前に伝達し、口頭で説明することや重要事項はメモをとるよう繰り返し指導する配慮は必要だろう。

③ 授業効果と学習意欲

質問11（授業に触発されて、さらに深く学習したい）(3.5)では、約半数の学生が5か4を選択したものの、15%もの学生が1か2を選択したため、平均値が低めになっている。質問11は内容的に質問12（授業を通じて、知識が深まった、能力が高まった）(3.6)

と関連があると考えられる。能力の向上と自発的学習は表裏一体の関係にあると考えられるからだ。約6割の回答者が質問12では5か4を選択しているが、質問11で5か4を選択した学生はやや少なく5割程度である。これに対応して、1か2を選択した率は、質問11で約15%、質問12で約10%となっている。このことから、授業で力はついたが、さらに深く学習したいとは思わない学生が一定数いると推測される。知識・技能自体を教授法の工夫により身につけさせることと、内発的動機を育成させることは違うということだろう。学習意欲が低い学生には、外発的・道具的動機を与えることにより、継続的な学習の動機付けにも配慮する必要があるのかもしれない。

④ 出席と学習意欲

「この授業によく出席した」で5か4を選択した率は9割以上であるが、「授業に意欲的に取り組みましたか」で5か4を選択した率は5割程度である。つまり、消極的な学習態度で授業に出席する学生が相当数いるということだ。したがって、いわゆる「出席点」は慎重に考えなければならない。ただ座っているというのではなく、「積極的に参加」している学生こそ出席点を考慮すべきだ。授業に出席しているが、勉強不足で授業について行けない学生の扱いをどうするかは大きな課題である。

⑤ 設備関連

設備関連では16（教室の広さ、座席形態）(3.9)以外は、ほとんどの学生が「該当せず」を選んでいるので、評価することはできない。ただし、教員が教室の設備に合わせて授業の工夫をしているために、問題が表面化しないだけであって、固定式でなく移動できる椅子の設置、ビデオやMDなどの視聴覚設備の拡充などで、教授法の選択肢が広がることは言うまでも無い。

2. 学習環境の整備

授業は、学生の学びたいという意欲と、教員の学生の能力を向上させたいという熱意の両方が融合することで効果が上がるものである。昨今は、学びたい気持ちはあるが、時間をかけて努力しない（あるいはアルバイトなど他の用事のためにできない）にもかかわらず、社会的に評価される実力が身につくよう大学教育で導いて欲しい、と考える学生が増えているように思われる。外国語科目は積み重ねが不可欠で、地道な努力なしに社会で評価される実力を身につけることは不可能である。特に初習外国語の場合には、まず最低限の体系的知識を習得しなければならないので、基本事項を覚えながら演習を繰り返していく地道な作業が欠かせない。わかりやすく、やる気もわいてきて、予習復習は少なく、実力がつく授業など、そもそもありえ

ない。外国語は学習と実践を通じてのみ上達するものなので、授業外でも外国語の予習・復習をしやすい環境を整備し、キャンパス内で外国語を実際に使用する機会を増やす必要がある。海外の語学研修を推奨する、留学生との交流を促進する、専門科目で専門書を原典で読むなど、各部局の連携も有効であろう。

3. アンケートの目的

授業評価アンケートは、教員が教育理念をもって授業を行う上で参考にするためのものである。レストランのアンケートのように、顧客のニーズや要望を単に反映させることを目的として行うものではない。点数の高低ばかりに注目すると、点数向上自体が自己目的化し、学生の意見に迎合するようなことになりかねない。5点満点に近いほど優れた教育であるといった安易な認識が広まることなく、教育理念に照らして適正かつ慎重に結果を評価しなければならない。

努力と忍耐の無い勉学は考えられず、モラルが低い学生には厳しい要求をしなければならないこともある。たとえ学生の理解が得られず、評価が低くなるようなことがあっても、学生の成長を願って厳しい指導が必要になる場合もある。そうかといって、教員の教育理念が独善的になってはいけない。関西大学の教育理念「学の実化」「学理と実際との調和」「国際的精神の涵養」「外国語学習の必要」「体育の奨励」と各科目の特性を考慮しつつ、各教員が自分の教育理念を熟考し続けることが教育の基本姿勢であろう。アンケートは、教員の教育理念と学生の学習目的とをつなぐ架け橋のようなものである。教員の側で正すべき点は正し、学生の意識変革が必要な点は学生に伝えることが大切だ。双方向のコミュニケーションの活性化こそがアンケートの目的であろう。

(FD部門・授業評価部門委員会委員)

体育実技における授業評価

雑古 哲夫

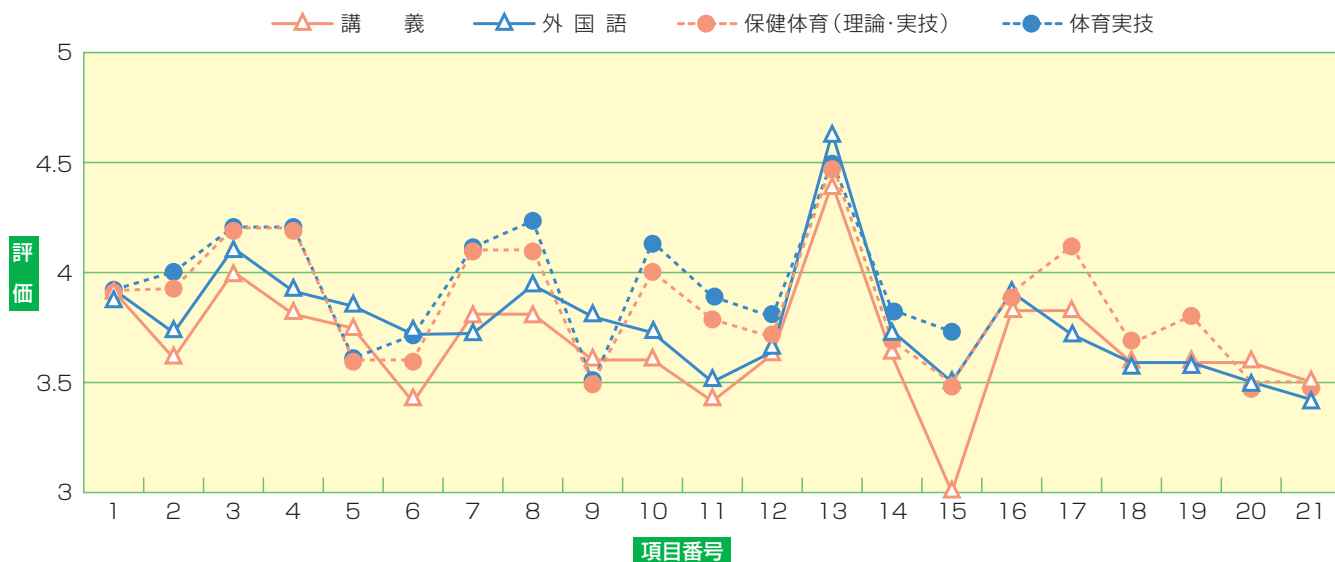
今年度から学生による授業評価に体育実技も加わった。これは授業評価を講義に止まらず実技や実習にも導入し、総合的に、より質の高い授業を提供していく上でのひとつの手がかりとしようというものである。今後、選択科目として実施される体育を学生がどのような視線で見ているのか大変興味があるところである。

体育における授業評価は、約200名を対象とした大教室での講義科目である保健体育理論において既に始まっていたが、今年度から実技科目も仲間入りし実施されることとなった。多くの先生方と授業評価について話をして気づいたのは、同一の担当の教員が同じ内

容の授業をしていてもクラスによって授業評価が異なることである。さてそれは何故であろうか。

体育担当の他の先生方もよく指摘されることであるが、学生の授業に対する満足度が高く、授業としても成功するクラスは、そこからリーダーが生まれ、チームワークが芽生える場合が多い。真面目に一生懸命課題をこなすことも評価すべき大切な要素であるが、社会で必要とされている人物はそれに加えて、将来リーダーとしてチームを動かすことのできる人物であろう。そのようなリーダーが存在するクラスは教員が黙っていてもリーダーが舵を取り授業を運営する。また教員が学生とうまく呼吸を合わせることができれば、今までリーダーになったことがない学生をリーダーとして活躍させ、積極的に授業に参加させることもできる。

体育は高等学校以前の教育でも実施されているが、



人と人とのコミュニケーション、スポーツマンシップ、ルールなどについての教育は大学で学ぶべき大きなテーマである。社会で必要とされている人間教育の重要な要素のひとつを体育が担っているといえるのではないだろうか。

学生による授業評価全体の結果は、講義、外国語、保健体育（理論・実技）、体育実技と比較してみると回答率に大きな開きがあった。講義の回答率は45.1%、外国語88.1%、保健体育70.3%、体育実技81.7%と、外国語、体育実技において高い値を示した。

また、講義と外国語、保健体育理論は同一の質問項目であるが、体育実技のアンケートはその特殊性から、質問項目を実技独自のものに変更した。しかし、全体としては、他の科目とほぼ同様に授業の内容や成果について把握できるアンケートとなっている。15項目のアンケートの質問項目について、講義と体育実技とを比較してみると、(5)教科書・配付資料の利用は

適切でしたか。/「かんだい体育」及び参考資料などの活用は適切でしたか。(9)宿題・演習は、講義内容を理解するうえで効果的でしたか/課題レポートは生涯体育を理解する上で効果的でしたか、についての2項目が共に0.1ポイント低いだけで、それ以外の項目は体育実技が高い値を示した。

回答率に関しては、保健体育の回答率は70.3%と外国語、体育実技よりは低いが、一般の講義と比べると25.2%ほど回答率が高かった。同科目の授業評価の平均値は今回、3.9で、質問項目に若干の変化はあるが、最初に調査を実施した2001年の春学期と比べて、大きく評価が上がっている。これが、授業評価アンケートが実施されて以来、授業内容自体が改善された結果だとすれば、授業評価アンケートは確かにひとつの成果を生んでいるといえるかもしれない。(なお、本文は通年科目を含む分析である。)

(FD部門・授業評価部門委員会委員)

学生と教員の交流会

中野 徹也

平成15年7月2日(水)、授業評価部門委員会（以下、委員会）の活動の一環として、「学生と教員の交流会」（於：尚文館（大学院棟）2階、生涯学習講義室）が開催された。

委員会は、6月上旬に開催を決定し、各学部掲示板にポスターを掲示して参加者を募集することにした。同時に、今回ははじめての試みということを考慮し、委員会委員が個別に声をかけ、参加者を募った。公募による参加者はいなかったが、各委員の呼びかけには、学部学生23名が応じてくれた。初回であり、募集期間も短かったこと（6月21日から6月27日）を考えれば、公募による参加者がいなかったことはやむを得ないだろう。ただし、後日募集方法を明確にしてもらいたいとの要望が一部の学部から出されたように、募集方法については再考の余地があろう。いずれにしろ、当日、多忙にもかかわらず、出席し貴重な意見を述べて下さった学部学生の方々には、この場をかりてあらた



めて謝意を表したい。ありがとうございました。

さて、12時10分から13時40分までと時間が限られているため、議事内容については、事前に参加者からメールで意見を収集し、関心の高い項目に限定することにした。その結果、主として、1. 授業、2. 授業評価アンケート、3. 事務の対応、4. 施設・設備について意見交換をすることになった。なお、司会が高橋FD・授業評価部門委員が担当した。

開催前には、沈黙が支配することも懸念されたが、杞憂に終わり、終始活発な意見交換がなされた。以下、項目毎に概要を記すことにする。

1. 授業

・大教室では、後ろまで声が届かない、文字が見え





ない、座る席がない。

- ・科目によっては、2回目以降に出席学生が減のを見越して、教室配当がなされている。その結果、教室の収容人数を明らかに超える人数が出席し、座る席がないので、あきらめて帰ることもある。
- ・私語が多い。
- ・時間帯が重複している講義の場合、シラバスだけでは決められないので、授業の様子を見て履修変更ができる期間を設けてほしい。
- ・語学のネイティブ教員のなかには、日本語が話せない上、早口なため、言っていることが理解できない人がある。質問の内容や、宿題なのかどうかとも分からず困っている。採用の際、日本語能力も考慮してほしい。
- ・当日急に休講になることがある。インフォメーションの休講情報が、授業開始後に掲示されたこともある。
- ・試験の結果は「優・良・可・不可」でしか知らされず、採点基準も不明瞭。答案を返却してほしい。
- ・専門用語が多く、理解しにくい。

2. 授業評価アンケート

- ・授業の改善に生かされているのか疑問。公表が必要。公表すれば、次に履修する学生も見ることができる。
- ・アンケート結果の公表には、慎重であるべきだ。
- ・自由記述は、第三者に公開するべきである。
- ・「こんなものは見ない」と公言する、アンケートに書かれた内容に激怒する先生がいる。
- ・授業評価の結果を、学部長など、担当の先生に注意できる立場の人に見てもらいたい。
- ・学生全員が真面目に記入しているか疑問。
- ・アンケートを記名方式にするべき。
- ・アンケート方法は、現行のペーパー方式ではなく、パソコンから入力できるようにしてほしい。自由記述の公開も容易になる。

3. 事務の対応

- ・授業の合間では、教室の移動等で用件が処理でき

ないので、昼休み時間（12：30～13：30）は、事務室を開けておいてほしい。

- ・事務への要望を提出できる制度（意見箱の設置等）を作してほしい。
- ・職員のなかには態度が横柄な人がある。
- ・先生への連絡先を教えてくれない。教員は連絡用のメールアドレスを公開してほしい。

4. 施設・設備

- ・新しい施設をつくる場合は、学生は学費を支払っているのだから、意見を聴いてほしい。
- ・図書館の地下書庫を、すべての学生に開放してほしい。
- ・ごみの分別をしてほしい。
- ・冷暖房の温度設定が不適切
- ・大教室では机と椅子が固定されていて、長時間座っているとストレスがたまる。自由が利く、体に合った、座り心地の良いものに変えてほしい。
- ・語学の授業では座席指定になっているが、荷物があると窮屈である。もっとゆったりとした座席指定をする、荷物置き場を作るなどの配慮をしてほしい。
- ・高槻キャンパスまでスクールバスを出してほしい。

5. その他

- ・成績発表をもっと早くしてほしい。
- ・タバコのマナーが悪い

このように、実に多種多様な意見が出た。教員・大学側に対する厳しい意見・要望もあったが、教育環境の改善に向けて、真摯に耳を傾けるべき内容のものである。委員会は、誠実に対処していくために、まずはこれらを全学共通教育推進機構委員会を通じて各学部・機構の執行部に提示し、意見を求めることにした。さっそく外国語教育研究機構では、ネイティブ教員に改善策を求めるなど、具体的な対応策がとられている。また、文学部は、独自にパネルディスカッションを開催し、そこでの討論を通じて、学生にフィードバックしていくとの意向を示している。他学部でも検討中である。

（FD部門・授業評価部門委員会委員）





『中南米経済論』から

◆はじめに：FDの求道者

1994年『学生参画授業論』（学文社）を発表して3年目の秋、私は長谷川先生と出逢った。それ以来、氏は一貫して理想の授業の“求道者”である。もちろん、氏のメインテーマは、これからの“大学教師とはいかにあるべきか”である。氏には、FDの本筋としての“生き方としてのFD道求道者”と呼べる迫力を感じる。

私は、これまでに、あえて私自身の参画授業のトータルな姿は、いくつかの講演の記録集の他には発表してきていない。参画型授業は、授業者100人100通りであるべきだと考えているからである。その意味で、今回の関西大学における長谷川実践のビデオ『中南米経済論』は、わが国初の参画型授業の1つのあり方の全体像（トータルイメージ）を共有できる貴重な作品である。

小論では、このビデオの含意（意味・意義・示唆）を理解するために、なかなか表面には表れない参画型授業を見るためのFD的視点を紹介したい。

◆“授業への参加”から“授業づくりへの参加”へ ——FDへの学生参画の視点——

参画の本質は、単なる“場”への参加ではなく、“場づくり”への参加である。その意味で、学生参画型授業は、一般の学生参加型授業とは区別される。

学生のアクティブ（積極的）な参加を引き出す一般の参加型授業は、あくまでも教師がその責任において計画し準備し取り仕切る授業方式である。しかし、この参加型授業が発展してきて、もし、教師も学生も、アクティブさを飛躍させることで、創造的生産物（クリエイティブ・プロダクト）を求める時はじめて、学ぶ場の場づくり自体に学生が参加する参画段階（または参画モード）に前進することになる。したがって、あえて学びの質（クオリティ）の飛躍的向上を求めている教師や学生には、“参画型授業”の本質は見えてこないし、根本的には不要だと言える。

ところで、この学生参画モードの隠された魅力は、一般に大学教師がFDの中心テーマとしている“授業開発”に学生が参加する点にある。現に、1997年以

来、長谷川先生の授業に参画した学生は、事あるごとに多くの学外のFDセミナーで先生方に混じって自分たちの授業開発の成果を堂々と発表し続けている。彼らに接していると、これからのFDの枠組みの中には、学生参画を組み込むべきだと自然に感じられてくる。

◆グループワークからクラスワークへ

——FDの焦点としての組織的知識創造力養成の視点——

長谷川先生の参画授業は、単なるいくつかのグループワークによる研究発表の寄せ集めではない。なぜなら、そもそも①各チームのテーマは、クラスの全員で有効に分担したものであり、②各チームの研究の方法と発表（授業）の方法は、毎回全員で共有・改善され、毎回クラス全体の“方法知”として確実に上昇させながらリレーされており、さらに、③研究発表の内容も重複を巧みに避けて、クラス全体で“内容知”として全体像が共有されながら慎重にリレーされており、結果として、④各チームだけでなく、各個人に授業目的の中南米経済の全体像が自然に獲得されるよう工夫されているからである。すなわち、単なる孤立したグループレベルの学習の寄せ集め（アセンブリー）ではなく、あくまでクラスレベルの組織的な知識創造がめざされている。これを、私は『クラスワーク』と呼んでいる。

この目標達成のための“場づくりツール”が、①毎回の複写式ラベルによる『感想ラベル』の共有システム、②毎授業での『授業企画書』の配布による共有システム、③毎回の『クラス新聞』による共有システムである。これらに対して、長谷川先生が毎回丁寧に目を通して、スーパーバイズを行っているわけである。このような、学生と教師の丹念なクラスという学びの場の場づくりによって、はじめて‘誰でも、いつでも、何でも’言える創造的な風土が醸し出されているわけである。

新世紀が『知識社会』であることが、年々明らかになってきている今日、大学のFDの焦点は、大学として、学部として、学科として、クラスとしての組織的な知識創造のシステムを構築することと、それを運用できるだけの教員と学生との力量形成である。長谷川実践は、その中核部分を軽々とクリアーしていることを、学生の生き生きとした表情が物語っている。

◆おわりに：今後のFDアクションリサーチのために

長谷川先生のビデオを拝見していると、氏がこれから一生をかけて、確かなFD道を学生と自然体で歩んでいけるだろうと確信できる。それは、日常の授業実践に組み込まれた等身大のアクションリサーチの確かなサイクル（小仮説→検証→小仮説→検証）から大仮説へ、そして理論への地味な積み重ねだと見て取ることができる。

あえて、個人的に氏への期待を述べさせてもらえる

なら、①困難は察することができるが、より現場に近づくフィールドワークの工夫、②先学を含めたゲストやボランティアワーカーの活用、③日常の教室内外でのリサーチ活動へのラベルワーク（特にラベル思考）の活用などをあげたい。

私は、長谷川先生のビデオをきっかけに、“学生参画型授業（の開発）”にチャレンジされる先生方や学

生さんを、できるだけ支援したいと考えている。長谷川先生共々、私にも気軽にアクセスして頂ければ幸いです。（武蔵大学教授）

E-mail : hayashi@cc.musashi.ac.jp

URL : <http://www.ne.jp/asahi/srs/office/>

FDに関する推薦図書

雨宮 俊彦

◆人文・社会科学の教育とクリティカルシンキング

大学における人文・社会系の学問の教育は、実学として、社会に出てから何の役に立つのか。学問的探求やトレーニングをつうじて、合理的な問題解決能力とコミュニケーション能力を身につけうる点があげられると思う。合理的な問題解決能力の要になるのはクリティカルシンキングの能力である。ここでは、FDの方法というより、FDの成果に関連した内容になるが、人文・社会系の領域におけるクリティカルシンキング教育についての本を紹介する。

クリティカルシンキング教育は、事実と意見の区別など、ごく基本的な問題から始まる。しかし、単なる教養教育のレベルにとどまるものではない。クリティカルシンキングは、相関関係の錯覚、因果関係の確定法、帰属錯誤、実験計画法、統計的検定、調査手法、メタ分析、疫学的推論、論理的推論と議論の方法、誤解を誘導する言葉、虚偽論など、心理学や社会学、論理学などの人文社会科学の諸分野の専門的研究と関わっている。また、専門の研究でもちいられる科学の方法は、クリティカルシンキングのコアであり、言説の品質管理が最も厳しい領域である。研究の世界に接することは、クリティカルシンキングの最良の実践領域を経験することになる。

日本では、クリティカルシンキングについては、ビジネス関係で、何冊もテキストがだされ、また、コースも開設されるなど注目されている。しかし、高等教育関連では、クリティカルシンキングをテーマにした本は少ない。心理学関係で若干注目され、医療介護関係での試みがあり、また、文学部のコアカリキュラムの一部分をなすものとして議論されている程度である。以下、心理学関係、社会科学関係、論理学関係の本をいくつか紹介する。

A. 心理学関係

ゼックミスタ・ジョンソン（宮本他訳）1996：「クリティカルシンキング入門編」北大路書房

道田・宮元・秋月 1999：「クリティカル進化（シンカー）論：OL進化論で学ぶ思考の技法」北大路書房

前者では、人間行動の真の因果関係をいかに確定するのか、どんな落とし穴があるのかといった科学の方法の基本について、認知心理学、社会心理学における研究成果の紹介と関連づけてわかりやすく解説されている。後者では、秋月りす（本学文学部出身）の四コママンガを通じて、同じテーマがぐっと親しみやすくかみくだかれて紹介されている。



B. 社会科学関係

岡岡一郎 2000：「『社会調査』のウソ：リサーチ・リテラシーのすすめ」文春新書

有力メディアや政府やNGO、学者が報告する調査の多くが、ゴミであることを、かたよったサンプル、バイアスのかかった質問項目、不適切な集計、まちがった因果関係の解釈などなど、多くの印象的な例を通じて、非常に説得的に指摘している。ここでの指摘は、裏返せば誤りを避けて調査を進めるための指針になる。人間の可謬性の認識はクリティカルシンキングの前提である。

C. 論理学関係

齊藤了文・中村光世 1999：「『正しく』考える方法」晃洋書房

香西秀信 1995：「反論の技術」明治図書

論理学はこれまで記号論理学一辺倒だったが、1980年代の後半から、虚偽論など、より具体的な推論の側面の研究も行われるようになってきた。前者は日常の推論についてわかりやすく解説したテキストである。また、近年、学校教育でディベートが行われるようになってきたが、香西氏にいわせると、技の基本を教えずにいきなり柔道の試合をさせているようなところがある。後者は、レトリック研究で蓄積されてきた議論の技の基本を紹介した本である。

（FD部門・授業評価部門委員会委員）

「高等教育とIT ―授業改善へのメディア活用とFD―」

高等教育シリーズ124

山地弘起・佐賀啓男編 玉川大学出版部 2003年10月刊



本書は、文部科学省メディア教育開発センターにおける、「メディアFD」(ITや各種メディアの有効活用に向けて教員の努力や教育環境の整備を支援する取り組み)に関する共同研究チームによってまとめられたものである。内容は大きく二部に分かれており、まず第一部において、メディアの高度活用の意味が整理され、そのあと授業改善事例7件が紹介されている。次いで第二部において、メディア活用に向けたFDの考え方が整理され、そのあとFD事例7件が紹介されている。おもに人文社会系の事例から成っているが、昨今のITブームのなかで、高等教育においてどのような実践姿勢が求められるかに応えた意欲作といえよう。

掲示板 《第5回 FDフォーラム》開催

■ テーマ：魅力ある授業づくり～教育メディアとプレゼンテーション力を活かす～ ■

日時◆平成15年12月3日(水) 14:00～17:00

会場◆千里山キャンパス

尚文館(大学院棟)1階

マルチメディアAV大教室

高槻キャンパス

大学院棟TD106教室(同時中継)

内容◆挨拶

柏木 治(かしわぎ おさむ)

全学共通教育推進機構長

第1部

①「授業で『わかる』・『納得する』とは？」

田中 俊也(たなか としや) 文学部教授

②「教育メディアの活用」

山地 弘起(やまじ ひろき)

メディア教育開発センター助教授

③「プレゼンテーション力をつける」

山名 年浩(やまな としひろ)

総合情報学部教授

第2部 パネルディスカッション

パネリスト

田中 俊也・山地 弘起・山名 年浩

浜野 潔(はまの きよし) 経済学部教授

時任 隼平(ときとう じゅんぺい) 総合情報学部4年次生

司 会

久保田 賢一(くぼた けんいち)

FD部門・授業評価部門委員長

◆挨拶

水越 敏行(みずこし としゆき)

全学共通教育推進機構特別顧問

◆総合司会

長久 良一(ながひさ りょういち)

FD部門・授業評価部門委員会委員

■ 活動記録

2003.6.17 平成15年度第5回FD部門・授業評価部門委員会
2003.6.16 2003年度春学期・前期「学生による授業評価」
～6.28 アンケート実施
2003.7.2 第4回FDフォーラム開催
2003.7.8 平成15年度第6回FD部門・授業評価部門委員会

2003.9.30 平成15年度第7回FD部門・授業評価部門委員会
2003.10.14 平成15年度第8回FD部門・授業評価部門委員会
2003.10.28 平成15年度第9回FD部門・授業評価部門委員会
2003.11.13 第2回公開授業研究会開催
2003.11.18 平成15年度第10回FD部門・授業評価部門委員会

◆◆◆◆◆
**FD部門・授業評価
部門委員会委員**
◆◆◆◆◆

部門委員長
委 員

久保田 賢一 総合情報学部教授
中野 徹也 法学部専任講師
雑古 哲夫 文学部教授
長久 良一 経済学部教授
長谷川 伸 商学部専任講師

雨宮 俊彦 社会学部教授
堀井 健 工学部教授
高橋 秀彰 外国語教育研究機構助教授
市川 明 大学事務局 全学共通教育推進機構事務長